

## 神様の救いの計画は 途切れることなく

民数記27章12～23節  
2021年4月25日  
松田 基子 師

神様は、世界の創造主、人間の命の与え主、歴史を導くお方として、世界が造られた時から世界を支配し、導き続けておられます。神様はせっかくわたし達人類を、ご自身の愛の受け取り手として信頼し、世界を更に良いものに成長させて行くために、ご自身が造られた世界を人間に託して下さったのですが、人間はその神様の愛を裏切り、**自分達が世界の支配者の座に坐ってしまいました。** そのことこそが**最大の罪**であり、その行き着くところは**永遠の滅び**でした。

人類は絶望でした。ところが命の与え主である神様は、人類の反逆にも拘わらず、世界の**歴史を人類救済の歴史に変えられた**のです。その救済方法は、人間自身に可能性は全くなく、神の御子が人類の**罪を贖う**ことによって、救済の道が開かれるというものでした。しかし、そのことは、罪の自覚の無い人間に**罪を教え**、神様に**信頼**し、神様に**聞き従う**ことこそ、人間の使命であり、**本分**であることを教えて行かなければならない、長い時間を必要とするものでした。

そのために選ばれたのが、神様の呼びかけに応答し、従ったアブラハムの子孫のイスラエルの民でした。イスラエルの民はエジプトの奴隷となっていました。神様は彼らの先祖アブラハムに、創世記22章18節で、

「**地上の諸国民は全て、あなたの子孫によって祝福を得る。**」

と約束された事によって、イスラエルをご自身の民に育てる計画をお立てになりました。

そのためにモーセを誕生させ、ファラオの悪策を用いて、モーセをエジプトの王女の子として、育てさせ、出エジプトの指導者となるためにエジプト最高の学識、教養、戦術を身に付けさせ、指導者としての資質を育てられました。

モーセ自身もエジプトの栄耀栄華に溺れることなく、ヘブライ11章25節によると、

「**はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選び、キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました。与えられる報に目を向けていたからです。**」

とあります。そのようにして、神様に選び出された、イスラエルの指導者モーセでした。

イスラエルが神様の民となるためには、神様に信頼し、御言葉に聴き従うものとなる、永い訓練が必要でした。神様は奴隷のイスラエルを、エジプトから脱出させるために、10の奇跡を起こされました。出エジプト後、荒れ野の旅に導かれてからも、朝毎にマナを食物として与え、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって愛と配慮のうちに、イスラエルの民を導かれました。しかし、民はその神様の愛と、憐れみの尊さに気づきませんでした。彼らはまた、自分達に神様の人類救済の歴史を担う、尊い務めが与えられているということにも気づきませんでした。

彼らは常に自己中心で、目先の利害にしか関心はありませんでした。指導者モーセの苦労は並大抵の事ではありませんでした。イスラエルの民は、神様が朝毎に食物として与えて下さるマナに感謝せず、民数記11章4節で、

「**誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、キュウリやメロン、葱や玉葱やんにくが忘れられない。今ではわたしたちの唾は、干上がり、どこを見回してもマナばかりで何もない。**」

と不平に口を尖らせています。

この様な言葉はわたし達の心からも聞こえて来ます。人は、誰も神様に信頼して、神様に生かされている思いをもって遜り、神様から与えられている使命が分からなければ、この様に不平不満・眩ししか出て来ません。この様な頑な民を導いて行かなければならないモーセの苦しみ、苦労は大変なものでした。

モーセは神様に訴えています。

民数記11章11節で、

「モーセは言った、  
『あなたは、なぜ、僕を苦しめられるのですか。なぜわたしはあなたの恵みを得ることなく、この民全てを重荷として負わされねばならないのですか。わたしがこの民全てをばらみ、わたしが彼らを産んだのでしょうか。あなたはわたしに、乳母が乳飲み子を抱くように彼らを胸に抱き、あなたが先祖に誓われた土地に連れて行けと言われます。』」

モーセはこの様に神様に訴えずにはいられない、苦悩の中を通されましたが、その度に神様の助けの御手で道は開かれ、民を導き続けました。

エジプトを出るとき、20才以上の第一世代は神様への不信仰故に、約束の地の入口に来ながら、入ろうとはしませんでした。神様に信頼せず、現実の不安から、彼らは呟きました。

民数記14章2節で、

「エジプトの国で死ぬか、この荒れ野で死ぬ方がよほどましだった。」

と言っています。神様はこの言葉を聞いておられました。そのために、主に信頼したカレブとヨシュア以外は皆、自分たちが言った言葉の通り、荒れ野の放浪40年の間に死んでしまいました。

モーセと共に民の大祭司として、モーセを支えて来た、兄アロンもエジプトの国を出て、第40年の第5の月の1日、ホル山に於いて123歳で死にました。大祭司職はアロンの息子エルアザルに与えられました。イスラエルは荒れ野の40年の放浪から、遂に約束の地を目前にする、ヨルダン川の対岸にあるモアブ平野までやってきました。

そこで神様は、モーセとエルアザルに向かつて第二の人口調査をするように、お命じになりました。その時エジプトを20歳以上で出て来た者は、カレブとヨシュアそして、モーセの3人だけでした。神様は既に、世代交代をさせておられました。人の命は神様のものです。神様が与え、また、お取りになります。命を支配し、歴史を導いておられるのは神様です。

人類救済の歴史も、神様のご計画によって進められて行きます。わたし達はそこに神様の栄光が表されることを第一の願いとして、神様から与えられた使命に徹して行く事が求められています。モーセはその事に徹した人でしたが、彼もまた、地上の務めを終えて去るべき時が来ました。

民数記27章12節に、

「主はまた、モーセに言われた。

『このアバリム山に登り、わたしがイスラエルの人々に与えた土地を見渡しなさい。それを見た後、あなたもまた兄弟アロンと同じように、先祖の列に加えられるであろう。』」

とあり、同じ内容が、

申命記32章49章によりますと、

「エリコの向かいにあるモアブ領のアバリム山地のネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に所有地として与えるカナンの土地を見渡しなさい。あなたは登っていくその山で死に、先祖の列に加えられる。」

と記されています。

ネボ山の頂上からは、死海を眼下に、そこに流れ込んで来る、ヨルダン川の西側に、約束の地が広がっているのが見えます。神様は、モーセに、第一世代の罪を負うことを求め、約束の地に入ることをお許しにならないのですが、ここまでイスラエルを導いて来たモーセの苦労は、誰よりも神様が一番ご存知で、彼の地を見せる事を、神様はモーセにお許しになりました。モーセほど、神様に忠実に聞き従った人は居ません。

しかし、神様は罪をうやむやになさるお方ではありません。神様はその理由として、

民数記27章14節で、

「ツインの荒れ野で共同体が争ったとき、あなたたちはわたしの命令に背き、あの水によって彼らの前にわたしの聖なることを示そうとしなかったからだ。」

と言われました。

民数記20章を見ますと、ツインの荒れ野では、

水場がありませんでした。民は渴き、徒党を組んでモーセとアロンに逆らったのです。また、彼らの喧嘩が始まりました。20章3節に、

「同胞が主の御前で死んだ時、我々も一緒に死に絶えていたらよかったのだ。なぜ、こんな荒れ野に主の会衆を引き入れたのです。我々と家畜をここで死なせるためですか。なぜ、我々をエジプトから導き上らせて、こんなひどい所に引き入れたのです。ここには種を蒔く土地も、いちじくも、ぶどうも、ざくろも、飲み水さえもないではありませんか。」と訴えてきました。

こんなに不平不満に溢れ、忍耐の無い人々に対して、並の指導者なら、

『神様もう、わたしには勤まりません。

だれか、別の人を立てて下さい。』

と言うでしょう。しかし、モーセが誰よりも優れた指導者であったことは、神様から一度受けた使命を、決して放棄しなかったことです。

神様はモーセに、20章8節で、

「アロンと共に共同体を集め、彼らの目の前で、岩に向かって、水を出せと命じなさい。あなたはその岩から彼らのために水を出し、共同体と家畜に水を飲ませるがよい。」

とされました。

モーセもアロンも、自分のことしか考えられない、口を開けば不平不満しか出て来ない共同体に、怒りが湧いてきました。その心を彼らに投げ返さずには居られませんでした。

地上の誰にも優って謙遜であったと言われるモーセに相応しからぬ言葉が出てきました。

『「反逆する者らよ、聞け。この岩からあなたたちのために、水を出さねばならないのか。」モーセが手を上げ、その杖で岩を2度打つと、水がほとぼしり出たので、共同体も家畜も飲んだ。」

とあります。

ところが神様は2人に対して、20章12節で、「あなたたちは、わたしを信じることをせず、イスラエルの人々の前に、わたしの聖なること

を示さなかった。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない。」

とされました。

「怒りを遅くせよ」

とされていますが、怒りと言うのは、神様に信頼して委ねることが出来ないで、自分の不満を相手にぶつける事です。神様はモーセに、

「わたしを信じることをせず、」

と言っておられます。岩波訳では、

「信頼せず」

とあります。つまり

『信頼して任せる事をしなかった結果、自分が神様より前に出て、自分達の思いを主張して、自分達の手で、水を湧き出させるかのように振る舞ってしまいました。』

神様の偉大さ、尊さ、清さを傷つけたことは明らかです。モーセは、神様の言葉に、自分の罪を認め、お詫びしたに違いありません。

モーセが生涯を通して願ったことは、神様に全信頼し、御心が成されて行くことでした。そのモーセなればこそできたことですが、この後、彼は同胞の罪を引き受け、死を受け入れて神様の御心に従って行きます。モーセの神様への従順でした。

いよいよ、召される日が近いと知らされたモーセに、一番気掛かりな事は、共同体の事でした。モーセは、27章16節で、

「主よ、全ての肉なるものに霊を与えられる神よ、どうかこの共同体を指揮する人を任命し、彼らを率いて出陣し、彼らを率いて凱旋し、進ませ、また、連れ戻す者とし、主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください。」

と願いました。

モーセは神様だけが命を与え、人間の真の支配者であることを信じていました。そのお方がこれから約束の地に導き、偶像の下で、罪と悪に満ちた人々と戦わせ、その土地を下さることを確信していました。そのためには、何よりも

神様に信頼し、御言葉に聞き従い、勇敢に戦い、民を愛する指導者が必要でした。神様はモーセの心配より先に、すでに、モーセの後継者を育てておられました。

神様は27章18節で、

「主はモーセに言われた。

『霊に満たされた人ヌンの子ヨシュアを選んで、手を彼の上に置き、祭司エルアザルと共同体全体の前に立たせて、彼らの見ている前で職に任じなさい。あなたの権威を彼に分け与え、イスラエルの人々の共同体全体を彼に従わせなさい。』

と命じられました。

神様の御計画は遠大なものです。神様はご自身の人類救済の完成に向かって、一人ひとりを母の胎内にあるときから、選び分ち、賜物を与え、ご自身の計画を進めて行かれます。モーセの生涯を見る時、そのことが良く分かります。その神様が、モーセで御計画を絶たれる筈がありません。神様は既にヨシュアを選んで、彼を、神様に信頼し、聞き従う魂に育てておられました。

ヨシュアもまた、モーセを助け、支えることを、神様から自分に与えられた使命だと受け取っていました。出エジプトをして、シナイ山に向かうその手前で、アマレクが戦いを挑んで来た時、モーセの命に従って、戦いに出たのがヨシュアでした。その背後で、モーセの祈りの手を、アロンとフルが支えました。モーセが律法を受けるために、シナイ山に登った時、40日間ヨシュアはモーセに仕えました。カナン偵察の時は、カレブと共に堅固なカナンの町々と、強力な住民に怯える10人の報告に抗して、神様に信頼し、約束を信じて進軍する事を説得しました。

彼はまた、幕屋に止(とど)まりました。ヨシュアはまた、モーセの従者として、モーセの神様に対する信仰、神様に忠実に従い、民を愛する愛を一番近くで学んできました。モーセ自身、神様がヨシュアを任命して下さる事を一番願っていたでしょう。

新しい世代は、祭司エルアザルとヨシュアに託す事が出来ます。モーセは22節で、  
「主が命じられた通りに、ヨシュアを選んで祭司エルアザルと共同体全体の前に立たせ、手を彼の上に置いて、(つまり、権威を委譲して、)主がモーセを通して命じられた通りに、彼を職に任じた。」  
のでした。

神様の人類救済のご計画は、決して途切れることはありません。今日の私たちは、救い主イエス・キリストによる御救いを与えられ、この信仰を次世代に継承して行くようにと、神様からその使命を託されています。わたし達もモーセやヨシュアのように、神様の人類救済の歴史の一駒ひとこまを、担う使命を自覚して、どんな試練や困難にも挫けることなく、神様に信頼し、信仰のバトンを確実に次の世代に渡して行くのではありませんか。

お祈りをします。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は、ご自身に背いた人類のために

イエス・キリストによる御救いを与え、

歴史を人類救済のために導いて下さっていることを感謝致します。

その御計画の一駒ひとこまに、わたし達を召し、用いて下さることを感謝致します。

わたし達はその大きな使命を自覚して、この救いを、次の世代にしっかり渡して行く者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの

お名前によってお祈りを致します。

アーメン。